

「信仰・希望・愛」の展開の物語

第六部 「永遠のいのち」(その1)

「わたしが復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。また、生きていてわたしを信じる者は、いつまでも死ぬことはない」

(ヨハネ福音書 11 ; 25 ~ 26)

現代では、死ねば自分と云う存在はなくなってしまうのだから、死を考えても仕方がない。生きている間、楽しめばよいのだと云う生き方をしている人が多いようです。しかし、大抵の人間はそれでは納得できず、何らかの形で死後の存在を問題にせずにはおれない面を人間は本性的に持っています。それが宗教を生み出します。そして、人間の歴史全体から見れば、死後の存在を信じている人が圧倒的に多いのです。しかし、人間は死後どうなるのか？これは所詮、聞き伝えか想像にすぎません。いま現実に「死んでも生きる」、「死ぬことはない」と確信できる質の命を持つのでなければ、明日死ぬかもしれない生の無常を克服し、確かな希望を持って生きる事はできません。時は一切の生けるものを死滅の淵に押し流し、すべての生に無常の刻印を与えています。時の流れのただ中にながら、この時を超え、その無常性を克服する質の命、すなわち、「永遠のいのち」を内に持つことが出来るのでしょうか。出来るとすれば、それはどうすれば得られるのでしょうか？

マルコ福音書に、ひとりの青年がイエスのもとに走り寄って跪いて尋ねました「善き師よ、永遠の命を受け継ぐ為には、何をなすべきでしょうか」。この質問は、死を超える命を慕い求めないではおれない人間の深い求めを代弁しています。この切実な問いにイエスは、また神はイエスを通してどのように答えておられるのか？を今回は考えようとする機会です。この人は、善き師から善き教えを聞いて、よく自分で考えて、それを守ろうとしたのでしょう。しかし、いのちの言葉はそのような次元のものではないのです。

イエスは何をすべきであるかについてモーセの律法を一応引用されます。青年はそれらの律法はすべて行っていると答えます。彼は何をすべきであるかを知り行っているのです。それなのに自分の中に「永遠のいのち」がないのを自覚しています。永遠のいのちとは。たとえそれが神の戒めを守ることであっても、人が何かを実行することで得られる性質のものではないのです。イエスはその事を悟らされる為に、彼に云われます。「自分の持つものをすべて売り払い貧しい人に施しなさい。そして私に従いなさい」と。イエスはここで慈善の行いを求めておられるではありません。彼がこのような問いを発する立場、すなわち、自分のわざで永遠のいのちを受けようとする立場を打ち砕く為です。イエスは彼に「財産を施すこと」でなく、「自分を捨て、ただ神の恩恵だけに依り頼む道」、**霊において貧しい者の**

道を歩むように求めておられるのです。それがイエスの道であり、イエスに従うことです。自分が持っている能力、知識、教養、立派な人格や善行、これらの一切は「神の国」に入るのに無意味だと認めることは立派な人ほど難しい。どんな人も自分なりに自分の立派さを主張したい。自分の持っているものを、徹底的に否認し、ひたすら神の恩恵にすがって、神によってのみ生きようとするのは困難です。これが人間の本性的な罪なのです。だから、イエスは云われました。「財産のある者が神の国に入るのは、何と難しいことか」と。それでもイエスは言われます。「狭い門から入れ。滅びに至る門は大きく、その道は広い。そして、そこから入って行く者は多い。命に至る門は狭く、その道は狭い。そしてそれを見出す者は少ない」(マタイ7:13~14)。永遠のいのちは自分の中にはなく、ただ神からだけ来るものです。上から与えられるものです。多くの単純・純粋な信仰を持つ婦人や子供が「狭い門」を通して、永遠のいのちに到るのは、ただ神の恩寵だけに頼っているからです。

「よくよくあなた方に云っておく。だれも新しく生まれなければ神の国を見ることはできない」(ヨハネ福音書3:3)

ニコデモは上記のイエスの言葉に対し、「年を取った者がどうして新しく生まれることが出来ましょうか」と質問します。イエスが「新しく生まれる」と云われるのは、「上から生まれる。すなわち神の霊の働きの中から生まれる」ことを指しておられるのです。イエスは「はっきり言っておく。誰でも水と霊とによって生まれなければ神の国に入ることはできない」。人間は何度生まれ変わっても、やはり同じ人間です。「肉から生まれる者は肉である」のです。肉とは生まれながらの人間本性です。そこから出てくるものはどんなに力を尽くしても、朽ち果てるものです。永遠のいのちに到ることの出来ないものです。「霊から生まれる」ものだけが「霊である」と云えるのです。「霊である」とは「霊であられる神とのつながりを持つことが出来る次元」を人間が内に宿すことです。霊の次元に生きる事によって初めて、人間は永遠のいのちに与り、神の国の現実に入って行けるのです。

イエスはこう云っておられるのです。「あなた方は神からの戒めを守れば、永遠のいのちを受けられるとして努力しているが、その様に努める自分自身をそのままにしている限り、真のいのちに到ることはできない。あなたたち自身の命の質は、神の命の質とは相反し、どのような立派な行為をしても、それで自分の命の質を変えることはできない。あなたがたが生まれつき持っている命とは全然別種の命を上から頂いて、新たに生まれるのでなければ、永遠の命を宿し、それによって神の国の現実を味わうことはできない」と。

イエスが語られた言葉の前で、現代人も立ち止まって考えて頂きたい。現代人は自分自身の問題を棚上げして、ひたすら外に向かって働きかけています。自分の在り方そのものは問わないで、「私は何をしたらよいか」だけを問題にしています。そのような人々にこの言葉は語りかけます。問題はあなた自身の中にある。あなたが神の霊によって新しく生まれ、今

まで生きた命と別種の命に生きるものでなければ、永遠の次元を見ることはできない。では「神の霊によって新しくされる」にはどうすればよいか？ 人の罪が、つまり自我が岩のように固く居座っている所では、霊は働けない。霊の働ける所は、十字架を信じ、十字架が仰がれている所、人間の自我が打ち砕かれ、十字架の下に打ち伏す者の上だけです。ですから、新しく生まれて、いのちの道を歩み始めるには、どうしても十字架の前にひれ伏して、自己を明け渡し、復活の命に生きるという活力を上から頂かねばならぬのです。

命のパン

——御霊のキリストとの合一——(ヨハネ福音書第6章)

ヨハネ福音書の性格

「永遠のいのち」を論ずる時、ヨハネ福音書を抜きにはできません。大ざっぱに言うと、聖書の宣教には二つの大きな流れがあります。一つは、使徒パウロの宣教に代表されるように、イエス・キリストの十字架と復活に集中して、そのイエスの事実の意味と、それを信受する者の救いの体験に重点を置く傾向です。ここではキリストは何時でも、復活される霊なるキリストです。このタイプの福音宣教では、地上のイエスの伝承は殆ど引用されません。もう一つの流れは、キリストを復活者として宣べ伝えることは同じですが、その福音の内容をあくまでも、地上のイエスが語られた言葉と、為されたわざによって語ろうとする傾向です。それは共観福音書と云われるマルコ、マタイ、ルカの三福音書がしていることです。イエスの地上での言葉や働きを目撃者(ペテロを代表とする弟子たち)が伝え、信じる者たちの群れが語り伝えてきた伝承を忠実に描いた福音書です。ヨハネ福音書はこの二つの流れを統一するような性格のものとして成立したと見る事が出来ます。

ヨハネ福音書は共観福音書と異なり、イエスの言葉を伝えるのを、伝承を忠実に用いることと限定していません。むしろ、ヨハネとその群れが、自分たちの現在の信仰によって聞いている霊なるキリストの言葉を、地上のイエスの言葉として書いています。どこまでが伝承による言葉か、どこからがヨハネが信仰によって、霊なるキリストから聞いている言葉か、分からないことが多いのです。でもこの福音書の目的に従って読むのであれば、すべて復活されたキリストが、今私たちに語りかけておられる言葉として受け取ればよいのです。この福音書では、地上のイエスの言葉の伝承と、「主なるキリストの告白」が一つに溶け合っているのです。この面がこの福音書に独特の性格を与えているのです。

イエスが5つのパンと2匹の魚で、男だけでも5千人と云う大勢の群集を養われたという奇跡が聖書に記載されています。この奇跡物語はすべての共観福音書に記載されていますが、ヨハネではこのわざについてユダヤ人との会話を通して、イエスは永遠のいのちに関する重大な真理を啓示されたのだと云っています。

「よくよくあなた方に云っておく。あなた方がわたしを訪ねてきているのは、しるしを

見る為ではなく、パンを食べて満腹したからである。朽ちる食物の為ではなく、永遠のいのちに至る朽ちない食べ物の為に働くがよい。それは人の子があなたがたに与えるものである。父なる神は、人の子にそれを委ねられたのである」(ヨハネ福音書6；26～27)。

いつの時代にも人が神に求めるものは自分の願望が満たされることです。パンを食べて満腹することです。神や信仰はそのための手段と考えていることが多い。イエスがなされた事を「しるし」と見て、それが何を意味し、神が自分たちに何を求めておられるのか知ろうとはしないのです。神が今イエスを通して与えようとされているのは、最後は朽ちるほかない地上の命の糧ではなく、「永遠のいのちに至る朽ちない食物」なのです。神は、それをどこで、誰を通して与えられるかを語られたのです。民衆は「神のわざを行うために、私たちは何をすればよいのですか」と尋ねます。

「神が遣わされた者を信じるのが、神のわざである」(ヨハネ福音書6；29)

彼らは為すべき多くのわざについて尋ねます。それに対してイエスは、ただ一つのわざで答えられます。これは極めて大胆で重要な宣言です。自分の人生が失敗だらけであっても、人からどんなに批判をされようと、ただ十字架、復活を信じぬくことが大切なのです。

「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」(ヨハネ福音書6；35)

これはユダヤ人には驚くべき言葉、理解できない言葉です。イエスが「私は天から下ってきたパンである」と云われたので、彼らは躓きました。彼らは「これはヨセフの子ではないか。どうして天から下って来たたと云うのか」と云って、イエスを拒みました。ユダヤ人でない私たちでも、自分の目の前でこう言われたとすれば、一笑に付するでしょう。

二種類の命

ここで「私が命のパンである」と云われたイエスの言葉は、ナザレのイエスがユダヤ人にだけ語っている言葉ではないのです。復活者キリストが世界に向かって言っておられる言葉です。むしろ、この「わたし」は本来、霊なる復活者キリストが世界に向かって言っておられる言葉でもあるのです。復活して今も生き給う霊なるキリストが、信仰によって彼、キリストに結びつくすべての人にとって、いのちの源泉となって下さる方であるからこそ、地上のイエスが「私が命のパンである」と云うことが出来るのです。

「よくよくあなた方に云っておく。信じる者には永遠の命がある。私は命のパンである・・・

中略・・そのわたしを食べる者は、いつまでも生きる」(ヨハネ福音6；40～51)

「イエスを信じる者は永遠のいのちを持っている」とイエスは断言されます。そして、「信じる」とは天から下ってきた命のパンであるイエス・キリストを食べることだとし、「永遠の命をもつ」ことを単的に「決して死ぬことはない」、「いつまでも生きる」と表現されます。当然「いつまでも生きる」に対して、人間は、イエスを信じても信じなくても、同じように死ぬではないか、と云う反論が出てくるでしょう。それは霊から生まれる者が上より与えられている命は、生まれながらの命と全然別のものであることを知らないからです。人が生まれながらに持っており、やがて死んで行く地上の命は「プシケー」と呼ばれ、霊から生まれた者が上より与えられる命は「ゾーエー」と呼ばれています。「一粒の麦」の譬えは「自分の《プシケー》を愛する者はそれを失い、この世で自分の《プシケー》を憎む者は、命を保って永遠の《ゾーエー》に至る(ヨハネ12；25)。そして、霊から生まれる者が持つ命は、いつもただ一言《ゾーエー》と云う語でも表わされます。《プシケー》で示す命は、信じる者も信じない者も同じように死にます。けれども信じる者が持つ《ゾーエー》が顕す命は別種のものでありますから、《プシケー》の死と関係なく生きています。「わたしを信じる者は死んでも生きる」と云うのはこのことです。《プシケー》は死んでも《ゾーエー》は生きています。そしてこの《ゾーエー》によって霊なる復活者キリストとの交わりにある者の《ゾーエー》は何時までも死ぬことはありません。復活者キリストによって生きているかです。「生きていてわたしを信じる者は、いつまでも死ぬことはない」のです。

それでは霊魂不滅説と一緒にではないか。彼らも肉体は死んでも霊魂は存在すると信じている、と云う批判があります。でも違うのです。第一に、霊魂不滅説の霊魂は人が生まれながらに持っているものですが、《ゾーエー》は、上から新しく与えられるものであることです。福音の光の下では、人間の体と霊魂は分けることが出来ない一体であり、その全体が《プシケー》に属するものとして死滅するのです。それが人間の存在様式です。創造者なる神が《ゾーエー》にふさわしい体を創造して下さる、それが復活です。ですから《ゾーエー》は復活に至る質の体である、と云えます。霊魂不滅的な永遠ではなく、ヨハネ福音書は永遠の命《ゾーエー》を告げ知らせようとします。それで、永遠の命を語る時には、同時に復活を語らなくてはならないのです。イエスは繰り返し言われます。

「わたしを遣わされたかたのみこころは、わたしに与えて下さった者を、わたしが一人も失わずに、終わりの日に復活させることである。わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることである。そしてわたしはその人々を終わりの日に復活させる」(ヨハネ福音書6；39～40)

復活こそ永遠の命の具体化(体を備えた完成像)です。復活に至らない命は結局滅びるのであります。私たち信じる者は、現在すでにこのような質の命を上より賜り、それを内に蔵し、それ

によって生きています。けれども、それを滅ぶ筈の《ブシケー》に属する体の中に宿し、《ブシケー》に属する、生まれながらの人間性(聖書はこれを肉と云います)との戦いの中でうめきながら《ゾーエー》にふさわしい体を与えられる日を待ち望んでいます。復活への望みこそ、《ゾーエ》の基本的な標識(メルクマール)です。

「信仰・希望・愛」の展開の物語

第六部 「永遠のいのち」(その2)

「人の子の肉を食べる者」(イエスの命を食べるユーカリスト=聖餐)

「よくよく言うておく。人の子の肉を食べず、又その血を飲まなければ、あなた方の内に命《ゾーエー》はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命がある。わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉は真の食物であるからである。」

(ヨハネ福音書6；53～55)

ここで「人の子の肉」「人の子の血」と云われていることに注意して下さい。「人の子」とは復活して天に挙げられることによって、天から下って来た者であることを確証された、イエスを指しています。その方の肉と血と云うのは、その方が十字架の上で肉を裂き、血を流されたことを指しています。「人の子の肉を食べ、その血を飲む」とは、復活された霊なるキリストを信じ、その方に自分の全存在を投げ入れて委ねることにより、キリストの十字架の死を自分の死と受けとめ、キリストの十字架の死に自分も合わせられて死ぬことです。それだけが永遠の命を受け、復活に至る道なのです。イエスは更に、

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。生ける父がわたしを遣わされ、またわたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きる」(ヨハネ福音書6；56～57)。

キリストの十字架に合わせられてキリストと共に死ぬ者は、もはや自分が生きているのではなく、復活されたキリストがわが内に生きておられるのです。キリストは神によって死の中から復活して生きておられます。キリストにある者も、キリストによって、この復活の命を生きるのです。

キリストを信じるとは、キリストを食べること以下ではありません。キリストを離れた所から眺めて、キリストに向かって自分から何かをしてゆくと云うようなものではありません。キリストに自分を明け渡し、「主よ！」の一言の祈りに自分の全存在を投げ入れ、キリストと一つに合わせられて一緒に生きて行くことです。パンは体内で消化され、私の体の一部となります。パンを食べ葡萄酒を飲む聖餐式も、本来この意味でキリストを食べることを象徴する行為であるわけです。よく若い時には熱心な信仰を持っているのに、何時の間にか信仰から離れてしまう人があります。結局霊の人イエスを肉の次元でしか知らなかったからでしょう。ついに復活されたイエスに会い、霊となられたキリストを体験し、最後までイエスに従って行く人は幸いです。その人は永遠の言葉を聞いて、永遠のいのちを得るに至ります。

聖餐式で聖餐を受けるのは、単にキリストの十字架と復活の記念式に参列しているだけ

のことでは勿論ありません。また、頂くパンと葡萄酒が現実にキリストの肉と血に変化していると、私には思えません。けれど、霊なる復活者キリスト・イエスが、そこに現在して、「わたしはあなたとこのように合一して常に支えているのだよ」と励まして下さる時だと思っています。だから、信徒はできるだけ頻繁に聖餐に与ることが最も大切なのです
(バルナバ 畑野栄一)

「神の道の終局としての死人の復活」(ヨハネ福音書第11章)

神の道への招き

福音は私たちを「神の道」を歩むようにと招いています。福音とは何かと云うと、その中身、実質はキリストです。キリストが私たちを永遠のいのちの道へと招いておられるのです。キリストとはナザレのイエスとしてこの世に現れ、神のみ心により私たちの罪を負って十字架の上に死に、復活して天に上げられ、今も「いのちを与える霊」として働いておられる霊的実存者です。このキリストが福音の告知を通して招いておられるのです。

霊なる復活者キリストはまず、出発点になる「門」を通して道に旅立つように招かれます。ニコデモとの対話の中で示されたように、復活者キリストを信じることにより、十字架に合わせられて自己が死に、キリストから聖霊のパプテスマを受け、その御霊の中から生まれることによって新しいいのちに生きるようになることです。

霊なる復活者キリストはさらに、このように新しい命の道に旅立った者たちに、御自身こそその命を養い生かす『命のパン』であることを示し、そのパンを食べて、永遠の命に至るように招かれます。この道は荒れ野を通る道です。すなわち地上にはこの命を養い生かす糧はありません。天から与えられる糧でなければ、真実の生を生きて行く事はできません。

この道を歩む者は何処に向かっているのでしょうか。イエスはそれを示すために地上での働きの最後に、最大の「しるし」を行われます。それがラザロになされた業です。「わたしは『命のパン』を食べる人々を終わりの日に復活させる」と語って、目的地を指しておられましたが、ラザロの場合は、勿論「死人の復活」ではありません。ただ「プシケー」への生き返りに過ぎず、ラザロはやがてまた死ぬわけですが、イエスはこの道の最終目的地が「死人の復活」であり、彼イエスこそ死人を復活される方であることを示されました。

「ラザロは死んだのだ。そしてわたしがそこに居合わせなかったことを、あなたがたのために喜ぶ。それは、あなたがたが信じるようになるためである」(ヨハネ11; 14~15)

イエスはここで、「死に至る死」と「死に至らない死」があるのだと云っておられる。弟子たちが何を信じるようになるためか。それは、神が神を信じた死人を復活させる方であること、しかも、復活してキリストとして立てられるこのイエスによって、死人を復活させられるということを、弟子たちや、私たち信徒が信じるようになるためです。

福音が言う「信仰」とは復活の信仰以下のものではありません。死人の復活の信仰に到達していない信仰は、まだ福音の信仰ではありません。神がイエスによって死人を復活させることを信じるようになるため、ラザロが**死んだことを確認されてからイエスは御業を行い、「しるし」とされたのです**。それからイエスは石で自分を打ち殺そうとした人々の所に出かけようとされます。弟子たちも「私たちも行って、先生と一緒に死のうではないか」と云って、出発します。復活に至る命の道をイエスと共に歩もうとする者は、いつの時代でも、イエスと共に死ぬ覚悟が必要です。

信仰は一般化される時、いのち無き抽象物になってしまいます。教義とか教条(信条)と云うものは信仰内容を一般化して宣べるものですから、ただ或る教義を受け入れてそれを信仰しているだけの信仰は、頭の中の一つの観念であって、人を変革し生かす力とはなりません。復活についても、終わりの日の死人一般の復活を教義として信奉するだけでは、それは今の現実の私と何ら具体的な関わりの無い一個の抽象概念に過ぎません。

私たちの復活信仰とは、最終的に復活されたイエスのように霊の体を持って生きるようになる。すなわち、**復活に至る質の命を今、現実**にこの身に宿して生きる事です。この**永遠の命によってこの私が復活するのです**。この体が焼かれて灰になろうが、神は今生きているこの私の命に、霊の体を与えて下さるのです。このように信仰は現実に霊なる復活者キリストとの交わりにあることからのみ来るのです。イエスはマルタに云われます。

「わたしが復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。また、生きていてわたしを信じる者は、いつまでも死ぬことはない」(ヨハネ福音書 11 ; 25~26)

イエスはマルタが信じる教条信仰の抽象性を乗り越えさせる為にこう言われるのです。

「わたしが復活である。わたしが命である」

復活は教義・教条の中にあるのではない。現にマルタの前におられる生ける人格イエス、私たちにあっては、今生きて働き給う霊なる復活者キリスト、この方こそ復活である、命そのものである、ということです。信仰とはこのキリストを食べることです。「主さま」の一言に自分の全存在をキリストに投げ入れ、一つに合わされて生きる事です。このような質の信仰においては、復活はもはや教義ではなく、自分の中にある命の現実となります。「死んでも生きる」ということが現実となります。この命の現実の中で霊なる復活者キリストとの交わりに生きる者は、その命が決して死ぬものではないことを知っています。

これが永遠の命です。

このように、福音が宣べ伝える永遠の命はまず何よりも復活に与ることであって、来るべき永遠の世における命です。確かにそれは、将来のことです。しかし、復活者キリストを信じるとは、将来の復活を待ち続ける事だけではありません。**現在のこの地上で永遠の命を生きる事なのです**。死に限定された存在の中で、死を克服した命を持つことなのです。この命

の消息を最も明確に語っているのは、矢張り使徒パウロです。パウロは自らのキリス体験とキリストに結ばれて生きてきた現実から、この命の消息を語り出しているのです。それは教理ではなく、現実の生の消息です。パウロは「**生きているのは、もはや私ではない。キリストが私の内に来て生きておられるのです**」(ガラテヤ 2 ; 20)と語っています。「今この地上に生きているのは、死に定められた私ではなく、死を突破して復活されたキリストである」と云うのです。既に復活されたキリストが生きておられるのですから、自分が死んでいるか生きているかはどちらでもよい問題になります。途上の生と死はもはや絶対的な矛盾ではなく、相対的な問題になります。すなわち、復活者キリストと共に生きると云う絶対的な価値の故に、地上の生と死は「生きるもよし、死ぬるもよし」と云う相対的なものになるのです。この境地から「**わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです**」(フィリピ1, 21)と云うパウロの言葉が出てきます。神に生きるとは、具体的には神がイエスを復活させた命を持って生きる事です。復活に至る質の命に生きる事です。それは、キリストの御霊、また神の御霊に充満する「**愛**」の命です。

パウロが「永遠の命」と云う時は、将来の復活と現在の命と云う両面が不可分に含まれていると考えられます。所が、パウロの手紙が書かれた時から40年程のちのヨハネの福音書になりますと、他の何よりも「永遠の命」が福音の主題になり、然もその「永遠の命」が現在の事実であるということが中心的位置を占めてしまったようです。

ヨハネ福音書が書かれた目的は、この福音書自体が明確に述べているように「**これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子キリストであると信じる為であり、また、信じて《ゾーエー》(永遠の命)を受ける為**」です」(ヨハネ福音書20 ; 31)。という言葉を書いています。ここには「復活」が抜けているようですが、「命のパン」の対話の所で、「**わたしが命のパンであり、わたしを食べる者=(私を信じる者)は永遠の命を得ている**」と、それは現在のことだと云われるのですが(ヨハネ6 ; 47)同時に、終わりの日の復活を約束しておられます。「**わたしがその人を終わりの日に復活させる**」(ヨハネ6 ; 40)と云っておられます。このように「死者の復活」は**福音の中心である**ことは、論を待ちません。パウロもヨハネも同じ視点で「永遠の命」と「復活」を語っているものと考えられます。

これで舌足らずでしたが、《永遠の命》を終わり、イエスの「神の国の説話=神の恩恵の開始」から始まり、「福音の告示」、「永遠の命」と続いた、私の報告の約束を終わりますが、全編にわたり、市川喜一師のご著書によったことは、何回もご報告をした通りです。この一連の文書は、市川師のご認可を得てはいますが、殆ど丸写しと云うところも多いのです。師の解説の方が皆様のご理解を得やすいと思ったからです。

尚、「天旅ホーム・ページ」をパソコンで開いて、師の「聖書研究」、その他詳細を知ることが出来ます。

あらためて

師に心から御礼を申し上げます。

以上で、私の約束は何とか果たしたと思っていますが、内心、まだ十分ではないという不満も持っています。と云うのは、人間全体、ことに信徒の生きざまの根幹である、「信仰と希望と愛」について、信仰はどうやら、足りないながら述べてきたと思うのですが、永遠の命を生きる内容の「神の愛」について述べる余裕がなかったと感じています。それで「神の愛」「キリストの愛」また私たちの師表となる、Iコリント13章「愛の讃歌」を取り上げて、もう少し私たちの「愛の生きざま」を探ってみたいと云う希望は持っているのですが、頭も働かなくなり、破天荒なこの夏の暑さで、どうなるか確かではありません。

ここで一息つかせて頂き、あらめて「愛」と「希望」を語ればと望んでいます。